ジェイルハウスの決戦

noprops／原作
黒田研二／著
鈴羅木かりん／イラスト

PHP
ジュニアノベル

卓郎
東部小学校の五年生。頭の回転が早く、決断力と行動力がある。頼れる存在。
ひろし
北部小学校の五年生。小学生とは思えない、洞察力と知識がある。なぞ解きが得意。
たけし
南部小学校の五年生。お調子者で臆病。でも、誰よりも友達思いのイイヤツ。
タケル
ビション・フリーゼという種類の犬。大切な人たちを助けるために、怪物と勇敢にたたかった。人間の言葉をすべて理解しているという事実を知ったひろしの提案で、モールス信号を応用し、言葉を伝えられるようになった。
美香
東部小学校の五年生。幼なじみの卓郎と、いつも一緒にいる。運動神経バツグン。

怪物（ブルーベリーモンスター）

ブルーベリー色の巨人。人間を見るとおそいかかってくる。ひろしたちはこの夏、「ジェイルハウス」などあらゆる場所でこの怪物に遭遇したが、犬が苦手であることや、頭が重く泳ぐことができないなどの弱点を突くかたちで、なんとか魔の手を逃れてきた。宇宙から飛来した物質・ブルースターの中に入っていた虫「パラサイトバグ」が体内に入ることが原因で、人間が怪物に変異する可能性があることがわかってきた。

マロン

シーズーという種類の犬で、女の子。美香の家で暮らしている。

ナオ

北部小学校の五年生。ひろしのクラスメイトで、クロさんとは伯父・姪の関係。

ハルナ先生

ひろしが通う北部小学校の教師。親友のユズキをはじめ、生徒たちが多数失踪し、閉鎖されることになった碧奥小学校の元・生徒でもある。クロさんの悪事を知り、ひろしたちに協力してくれる。

ユズキ

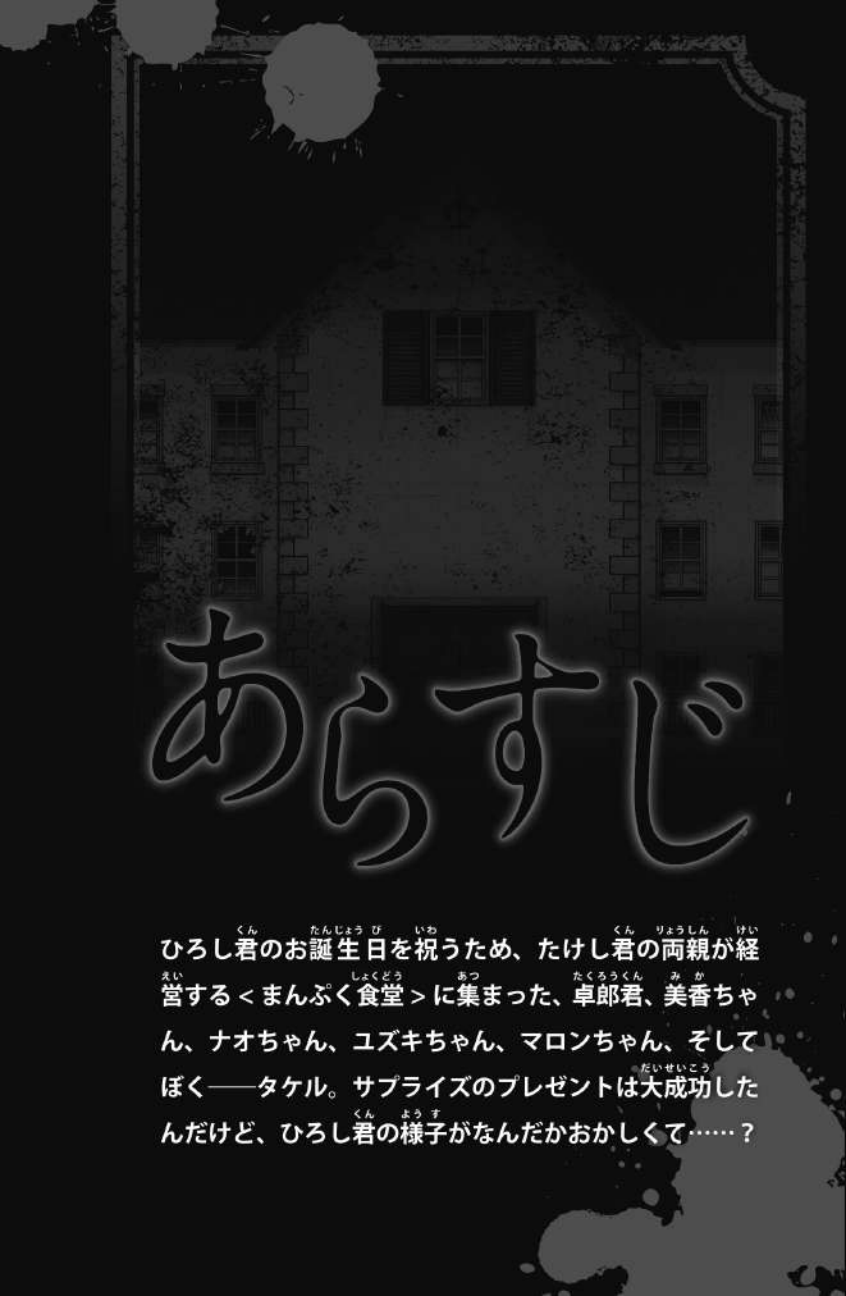
ハルナ先生の同級生として碧奥小学校に通っていたが、パラサイトバグを誤って口にしてしまい、ブルーデーモンになった。現在は力をコントロールできるようになり、人間だった頃の姿にも変身できる。

クロさん

怪物のことを「ブルーデーモン」と呼び、宇宙から飛来したブルースターを集め、この世界をブルーデーモンだらけにすることをもくろんでいる。自らもブルーデーモン化できる能力を得た。

目次

1 ジェイルハウスのメサイア 007
2 ひろし君の誕生パーティー 018
3 クロさんからの招待状 030
4 心強い味方 038
5 町の情報屋・イズミさん 047
6 こわれた街路灯 055
7 ジェイルハウス、再び 065
8 手厚い歓迎 075
9 食堂での対話 085
10 魅惑のスープ 094
11 ヒプノスの魔力 103
12 子供部屋の怪物 112
13 地下の迷宮 125
14 うばわれたスマートフォン 135
15 合流 145
16 スパイはだれ？ 155
17 ユズキちゃんの想い 162
18 ネコの示すもの 172
19 クロさんの手帳 182
20 パーティールームへようこそ 194
21 宴の終わり 204
ひろしによるなぞの解説 221
ジェイルハウスの見取り図 223



あらすじ

ひろし君のお誕生日を祝うため、たけし君の両親が経営する＜まんぷく食堂＞に集まった、卓郎君、美香ちゃん、ナオちゃん、ユズキちゃん、マロンちゃん、そしてぼく――タケル。サプライズのプレゼントは大成功したんだけど、ひろし君の様子がなんだかおかしくて……？

1 ジェイルハウスのメサイア

あたりに人影がないことを確認し、男はさびついた鉄の門をゆっくりとおし開けた。
のび放題の雑草をかき分け、目の前にたたずむ古びた洋館へと足を進める。
「……ジェイルハウス」
男はぼそりと、その洋館につけられた名称を口にした。
ジェイルハウス――日本語に直せば、〈牢獄の館〉だ。
いつからそんなふうに呼ばれるようになったのか、男はよく知らない。しかし、その名前をつけた人物が、この洋館のことをなにひとつ理解していなかったのは明らかだろう。
牢獄だなんてとんでもない。ここはホープハウス――〈希望の館〉だ。
派手な彫刻がほどこされた大きなとびらの前に立つ。カギはかかっておらず、ノブはたやすく回すことができた。
開いたとびらのすき間から心地よい香りがただよってくる。男はその香りを楽しもうと、深く息を吸いこんだ。

あまく、やさしく、希望に満ちた――これはメサイア様の香りだ。

メサイアのことを考えただけで、男の全身に電気のようなものが走った。この上ない幸せな気持ちに包まれ、自然と息づかいがあらくなる。

男は快感によいしれながら、屋敷の中へ入った。くつをはいたまま、廊下をまっすぐ進む。

屋敷内はきれいに清掃されていた。ほこりひとつ落ちていない。掃除の得意なブルーデーモンがひまさえあればがんばっているのだろう。毎日、メサイアに「よくやった」とほめられているのかもしれなかった。

うらやましい……。

男は嫉妬した。

僕だって、できることならこの屋敷にすみついて、メサイア様の身の回りのお世話をしたい。朝から晩までずっとメサイア様のそばにいられたなら、今以上に充実した毎日を過ごすことができるだろう。

しかし、メサイアが男に命じた仕事はパラサイトバグの回収だった。この世界をブルーデーモン一色に染めるためには、大量のパラサイトバグが必要となる。

男に課せられた使命はとても重要なものだ。それだけメサイアに信頼されているといっていいだろう。だが、この屋敷で生活している大勢のブルーデーモンたちのように、毎日メサイアに会えるわけではない。男はそれが歯がゆかった。

この洋館を訪れ、メサイアと対面できるのは週に一度きり——火曜日の早朝と決まっている。パラサイトバグの捕獲数をメサイアに報告することが、今日最初の仕事だった。

男は長い廊下のつきあたりで立ち止まった。目の前には真っ白なドアがあり、ノブの下には数字を打ちこむことのできるパネルが取りつけてある。

男は背すじをのばし、緊張した表情で四けたの数字を入力した。短い電子音があたりにひびきわたり、ドアがゆっくりと開く。

ドアの先には地下道へと続く階段が存在した。呼吸を整え、ゆっくりと階段を下りる。階段の先にあるのはうす暗いトンネルだ。天井からぶら下がったはだか電球がゆらゆらと不気味にゆれていた。

トンネルの奥へと歩を進める。そのたびに、メサイアの香りはこくなっていった。心音が高ま

る。右手で左胸をつかんだが、鼓動はまるでおさまりそうにない。

一週間ぶりにメサイア様に会えることはもちろんうれしい。でも……。

男は息苦しさを覚えた。

男が集めたパラサイトバグは、まだ当初の計画の三分の一にも満たない。今週にいたっては一匹も確保できていなかった。

……この状況をメサイア様はどう思うだろうか？

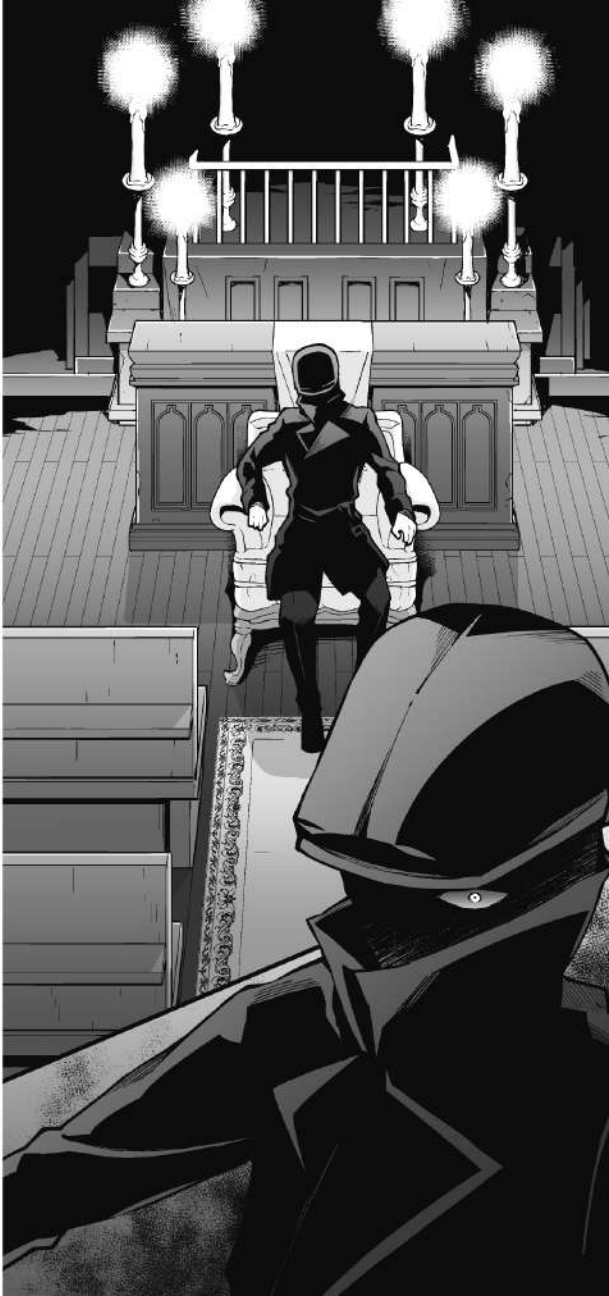
うす暗いトンネルをくぐり抜け、中世ヨーロッパの城を彷彿とさせるアンティークな部屋の中を横切る。大理石でできた廊下を進むと、目の前に両開きの大きなとびらが現れた。

とびらの中央には馬の蹄鉄のような金具が取りつけられている。男はとびらの前で立ち止まると、姿勢を正し、その金具を右手でつかんだ。

カン、カン、カン、カン——

金具をとびらにおし当て、四回ノックをくり返す。それがメサイアに謁見する際のルールだっ

た。
「……カマロか？」
とびらの奥から低くくぐもった声が聞こえた。
メサイア様だ。
息を止め、汗ばんだ手を強くにぎりしめる。
メサイアは男のことを「カマロ」と呼ぶ。本当の名前はもう忘れてしまった。男の相棒であるウサギのミミは彼のことを「クロさん」と呼ぶから、たぶん黒川とか黒田とか、そんな名前だったのだろうが、もはや人間だったころの記憶はあいまいだ。
なぜ、メサイアが「カマロ」と呼ぶのか、その理由はわからない。フランス語で仲間や同志のことを「カマラード」というが、それと関係あるのだろうか？
もし、メサイア様が自分のことを同志だと思ってくださっているなら、こんな光栄なことはないのだが。
「中に入れ」
メサイアの発した言葉とともに、とびらは自動で開いた。
室内には長イスが等間隔で設置されていて、その奥に祭壇が見える。一見すると、教会のよう



だ。しかし、祭壇の前にいるのは神父ではない。見るからに高級そうなアームチェアに座り、冷酷なまなざしでこちらを見下ろしているのは青いハンチング帽をかぶった初老の男性――メサイアだった。

メサイアが常に身に着けている黒いトレンチコートのえりにかくれて、顔の下半分はほとんどわからない。目深にかぶったハンチング帽もじゃまをして、唯一確認できるのはするどい眼光を放つひとみだけだ。

男はその場にひざまずき、深く頭を下げた。

「カマロ、そんなにもしゃっちょこばるな」

くっくっくっ……とメサイアがのどを鳴らして笑う。「しゃっちょこばるな」はメサイアの口ぐせだった。おそらく「緊張するな」という意味だ。

「頭を上げろ」

メサイアの言葉に従い、男は再び祭壇に顔を向けた。しかしなかなか、メサイアと目を合わせることができない。

「どうした？　顔色が悪いようだが」

メサイアの眉間に深いしわがきざまれる。

「パラサイトバグは順調に回収できているのだろう？」

「メサイア様、申し訳ありません！」

男はその場に深くひれふした。

「……今週はなかなか集めることができませんでした」
「だから、そんなにしゃっちょこばるなといっているだろう？　仕方ない。そんなときもあるものだ。で一体、何匹回収できたのだ？」
「一匹も……」
「……一匹も？」
メサイアの声色が変わった。
「どういうことだ？」
顔を上げなくとも、彼の機嫌をそこねたことは容易にわかる。早く質問に答えなければと男はあせったが、からからにかわいたのどからは空気しかもれてこない。
ふたりの間に長い沈黙が流れた。いや、実際には数秒の出来事だったにちがいない。しかし、男にとってはそれが何時間にも感じられた。
頭上から深いため息が聞こえてくる。
「どうやら、おまえのことを少しかいかぶりすぎていたようだな」
「申し訳ありません。次こそは必ず」
「先週も同じようなことをいっていなかったか？」

「あと少しということころで、またいつもの子供にじゃまをされたのです」
「ひろしとかいう少年のことか？」
「はい。彼さえいなければ――」
「だまれ」
メサイアの強い口調に、男はからだをふるわせた。
「その台詞はもう聞きあきた。子供たちがじゃまだというなら、さっさと排除してしまえ」
「待ってください」
男はその場にひれふしたまま、おびえながらも頭を横にふった。
「ひろし君は頭の切れる少年です。排除するのではなく、仲間に取り入れるのが得策かと」
「ならば、今すぐ仲間にしろ」
「しかし、それがなかなか……」
「パラサイトバグを無理やりのませてしまえばよいではないか」
室内の空気がびりびりとふるえるのがわかった。メサイアはひどく腹を立てている。
「ひろしという少年を我々の仲間にしろ。カマロ、これはおまえにあたえる最後のチャンスだ。失敗は絶対に許されない」

「……」
男は言葉を失った。
もし、ひろし君を仲間にすることができなかったら、僕はどうなるのだろう？　追放されるのか、それとも殺されるのか？
メサイアはイスから立ち上がると、床の上にうずくまっていた男のそばへと近づいた。
「心配するな」
男の背中に手をかけ、やさしく声をかける。
「あの子供たちの中に、スパイをまぎれこませておいた。彼らがなにをたくらもうと、こちらにはすべてつつ抜けだ。絶対に失敗することはないだろう」
「……スパイ？」
「〈ヒプノス〉は人の心を操ることができる。ひろしという少年がどれだけ優秀であろうとも、〈ヒプノス〉には太刀打ちできない」

「……」

「少年はこちらのいいなりだ。あとは煮るなり、焼くなり、好きにすればいいさ」

メサイアの冷酷な言葉に、男は激しい戦慄を覚えずにはいられなかった。

2 ひろし君の誕生パーティー

今日――十月二十三日は電信電話記念日らしい。
電信線の架設工事が日本で始まったのが、明治二年のこの日だったのだとか。
乾杯の前に、ひろし君にひとことあいさつをお願いしたら、そんな話が始まってしまった。
今日はひろし君の誕生日。学校が終わったあと、いつもの仲良しメンバーはたけし君のお父さんが切り盛りするお店〈まんぷく食堂〉に集まった。お店の好意で貸し切りにしてもらったため、ぼくやマロンちゃんもいっしょにひろし君の誕生日をお祝いできるのはとてもありがたいことだ。
今日の主役はひろし君。だからみんな、しばらくはひろし君のスピーチをだまって聞いていたのだが、「今日は、物質中の粒子の数を定義するアボガドロ数に由来して非公式に作られた〈モルの日〉でもあり――」となにひとつ理解できない話になったところで、卓郎君がようやくストップをかけてくれた。
「おまえの話を最後まで聞いてたら、日が暮れちまうよ。乾杯！」

そういって、コーラの入ったグラスを頭上高くに持ち上げる。

「まずはこれを食べてみてよ。オレが作ったんだぜ」

たけし君がテーブルの中央に置いてあった大きなお皿を持ち上げた。

「なにこれ、ニンジン？」

こんもりと盛り上がった細切りの野菜に、まゆをひそめたのは美香ちゃんだった。

「〈まんぷく食堂〉特製ニンジンサラダ」

「あたし、ニンジンはあんまり好きじゃなくて……」

「……ナオも苦手」

マロンちゃんの頭をなでながら、ナオちゃんも表情をくもらせる。

「そういうニンジンぎらいの人にこそ食べてもらいたいんだけどなあ。ほら、だまされたと思ってひと口どう？」
「だまされないってば。どこからどう見たってニンジンだもん」
「そういわずにひと口だけ」
「ん、もう。たけし、しつこい！」
おし問答を続けるたけし君と美香ちゃんのすぐ横で、
「……おいしい」
ぽつりとそうつぶやいたのはユズキちゃんだった。
「え？　おいしいの？　うそでしょう？」
美香ちゃんがユズキちゃんに顔を近づける。
「たけしさんのいってること、本当です。私も生のニンジンはそれほど好きではありませんが、これはいくらでも食べられます」
美香ちゃんに説明しながらも、いそがしくニンジンサラダを口に運ぶ。お世辞でないことはその食べっぷりを見れば明らかだった。
「……ビールにも合いそう」

厨房からこちらの様子をうかがっていたたけし君のお父さんがおどろいた様子でこちらを見るのがわかった。

この中でもっとも幼く見える女の子が、いきなり「ビールにも合いそう」などと発言したのだ

から、びっくりするのも無理はないだろう。

ユズキちゃんはここにいる子供たちの中で一番年下のように見えるけど、実はハルナ先生の同級生だ。二十年前、あやまってパラサイトバグを体内に取り入れてしまったことでブルーデーモン化し、それからは年を取らなくなってしまったらしい。

ユズキちゃんは二十年間、碧奥医院の地下病棟に入院していた。いや、入院ではない——幽閉だ。ときおり、巨大なブルーベリー色の怪物に姿を変える彼女は、周りの大人たちにとってとてつもない脅威だった。人目につかない場所へ閉じこめるしかなかったのだろう。

一体どれだけ悲惨な子供時代を過ごしてきたのか、と最初は気の毒に思ったが、ユズキちゃんの話を聞く限り、地下病棟での生活はそれほどひどいものではなかったらしい。

——院長先生も看護師さんも、みんなとてもやさしかったです。地下病棟の外に出ることは許してもらえなかったけれど、それ以外のことならたいていわがままを聞いてもらえました。好きなテレビ番組はいつでも見ることができたし、映画だってリクエストすればすぐにDVDを用意してくれたし、ほしいおもちゃはなんでもあたえてくれたし……もしかしたら、ふつうの子供たちよりめぐまれた生活を送っていたのかもしれません。

ユズキちゃんは笑いながらそういったが、それが本心でないことはすぐわかった。